新生児の視覚能力に関する
母親の知識と母子接触

東北大学教養部
仁平　義明 (Yoshiaki Nihei)
東北大学教育学部
村井　憲男 (Norio Murai)
東北逓信病院産婦人科
東岩井　久 (Hisashi Higashiiwai)　米本　行範 (Yukinori Yonemoto)
那須　一郎 (Ichiro Nasu)　菅原　徳子 (Tokuko Sugawara)
伊藤　範子 (Noriko Ito)

母性衛生・第26巻3号・昭和60年9月

新生児の視覚能力に関する母親の知識と母子接触

東北大学教養部
仁平　義明 (Yoshiaki Nihei)
東北大学教育学部
村井　憲男 (Norio Murai)
東北逓信病院産婦人科
東岩井　久 (Hisashi Higashiiwai)　米本　行範 (Yukinori Yonemoto)
那須　一郎 (Ichiro Nasu)　菅原　徳子 (Tokuko Sugawara)
伊藤　範子 (Noriko Ito)

I　要　約

新生児の視覚能力に関する母親の知識について，現状を把握し，知識の普及の背景にある要因を分析するために，質問紙調査を行った。"いつごろから目が見えるか"という漠然とした質問，さらに，光覚，形態視，追視の項目に分けた質問をした結果，いずれの場合でも，"1か月頃から"それが可能になるというのが，母親の最頻の答であった。その答の分布は，"出生当初から"から，"3，4か月頃から"までにわたっており，母親の知識には著しいばらつきが認められた。現在，知識の普及はその移行段階にあり，この種の知識の普及は，情報源への母親の非組織的な接触による場合が多いことが明らかにされた。さらに，子の視覚能力の発現の時期が早いと考える母親ほど，子に接する際に"自分の顔を見せるように特に気をつけていた"割合が高く，新生児の能力の知識が母子交渉のあり方に影響することが示唆された。

II　緒　言

母から新生児，乳児に対してどのような刺激や働きかけがなされるかは，母親が子の能力をどれだけ認識しているか，その知識内容に大きく左右されると考えられる。子が外界の刺激を認識可能であることを知る母親は，当然，相応の刺激を与え，また子からの信号にも敏感に応答するであろう。

近年，新生児研究は，基本的な感覚能力が，新生児に備わっていることを繰りかえし明らかにし，"有能な新生児"という考えを強調してきた。例えば，Gorenらは，生後数分の新生児が，選択的に顔パタンを追視することを報告している[1]。また，AtkinsonとBraddickは，多くの研究を総合して，新生児の視力はおよそ6/240であり，この視力でも，近い距離なら人の顔の基本的な部分を認識するのが可能であることを指摘している[2]。

わが国でも，小林登，加藤忠明らをはじめとして，新生児の能力に関する研究と知識の母親への積極的な普及の努力がなされつつある[3)4)]。しかし，このような研究上の知識が，直ちに，母親たちの一般的知識として普及するわけではない。われわれが乳児について実験を行う際の経験では，1か月児の母親でも，自分の子に，はっきりと追視が起こることを見て，驚きを示すことが少なくないのが現状である。また，育児書の記述も様々である。

そこで，本研究では，現に1か月児を持つ母親たちが，子の視覚能力についてどのような知識をもち，その知識が何に由来しているかについて，現状を把握しておくことを意図して調査を行なった。いずれ大きく変化することが予想される母親の知識について，現時点の記録をし，その要因を分析しておくことは，育児知識の時代的変遷を考えるうえで意味のあることと思われるからである。

Ⅲ 方 法

1983年6月から1984年3月までの10か月間に，宮城県仙台市内の東北逓信病院産婦人科外来において，産後1か月検診を受診した母親108名に，同意を得て，用意された質問紙に基づく聴き取り調査を行なった。調査時点での子の日齢は生後26日から40日の間，平均32.1日（SD 2.8）。母親の年齢は18〜37歳の範囲で，平均28.0歳（SD 3.2），有職率は20.4％であった。

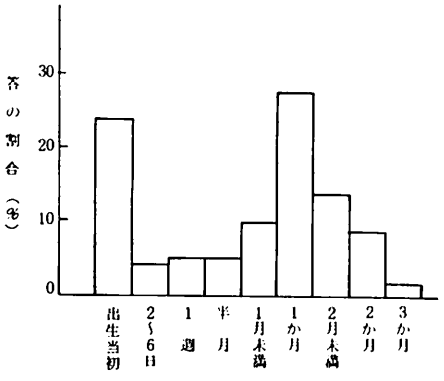
質問は，(1)新生児の視覚能力（明暗弁別，形態視，追視），(2)自分の子の視覚能力についての認識とその根拠，(3)視覚能力に関する知識の情報源，(4)子と接触するときの配慮，に関する内容であった。

Ⅳ 結 果

a．視覚能力に関する一般的知識

まず，母親の日常会話や育児書のなかでよく使用される“目がみえる”という漠然とした表現を用いて，“赤ちゃんは普通いつ頃から目がみえると思いますか”という質問をした。図1に示したように，答は，“出生当初から”から“3か月頃から”まで広範囲にわたっており，母親たちの知識のばらつきが極めて大きいことがわかる。そのなかでも，“1か月頃から”という答が最頻（27.7％）であり，それ以後の時期を合計すると，52.5％となり，半数を超える。“出生当初から”（“生まれてすぐ”という表現も含める）もそれに次いで多く，知識の分布は，二極に分かれているともいえよう。

図1. 『赤ちゃんは普通いつ頃から目が見えると思いますか』という質問に対する1か月児の母親の答の分布



さらに，“見える”内容の理解を詳細に確認するために，光覚（“光を感じる”（明るい暗いがやっとわかる）），形態視（“物の形がわかる”（人の顔とそうでない物の区別ができる程度に見える）），追視（“目の前でものや人の顔を動かすと追う”）が可能なのは，それぞれ，普通いつ頃からだと思うか質問をした。結果は，表1に示した通り，いずれについても，“1か月頃”が最頻の反応であった。しかし，1か月以後の時期を合計すると，光覚，形態視，追視は，それぞれ，35.4％，79.0％，80.4％になり，その順で遅いと考えられていることがわかる。従って，“見える”という漠然とした表現には，これらの反応が混合していることが推測される。また，出生当初から形態視と追視が可能だと考えている母親は，2.1％と1.0％にすぎない。

表1. 視覚能力に関する母親の知識内容の分布（％）（“普通いつごろから”できると思うかという問への答）

	出生時	2〜6日	1週	1月未満	1月	2月未満	2月	3月未満	3〜4月
光 覚 *	24.2	4.0	11.1	25.3	26.3	3.0	5.1	1.0	0
形態視 **	2.1	1.1	2.1	15.8	33.7	10.5	26.3	3.2	5.3
追 視 ***	1.0	2.0	2.9	13.7	38.2	14.7	22.5	2.0	3.0

*“光を感じる” **“形がわかる” ***“目の前でものや人の顔をうごかすと追う”

b．自分の子の視覚能力の認識

生後1か月の時点で，自分の子の視覚能力を母親がどの程度認識しているかについての結果を表2に示した。1か月児（平均日齢32.1日）の母親は，光覚で82.4％，形態視で18.1％，追視で50.0％が，自分の子に現在可能であるとしている。“できる感じがする”という不確実な認識を含めると，それぞれ，100％，61.9％，73.1％に達する。そこで，“できる”，あるいは，“できる感じがする”とした母親たちに，“いつ，そのことに気がついたのか”およ

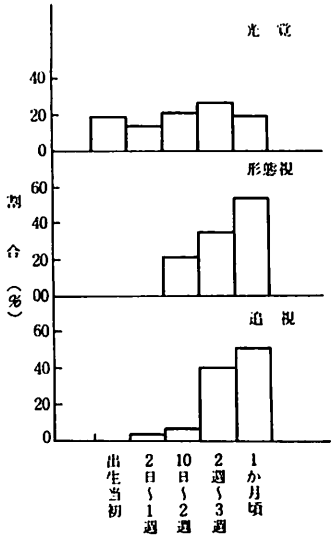
表2. 自分の子の視覚能力に関する1か月児の母親の認識

	現在できる	できる感じ	できない
光 覚	82.4％	17.6％	0
形態視	18.1％	43.8％	38.1％
追 視	50.0％	23.1％	26.9％

び"そう思った理由"を尋ねた。

1か月時点で自分の子の能力をすでに認識している場合，その時期は，光覚で生後2～3週前後，形態視，追視で1か月頃が最頻であった（図2）。特

図2. 1か月児の母親が子の視覚能力に気づいた時期
（子は既に可能であるとしている場合）



に光覚は，合計32.7%の母親が出生当初から1週頃までの間にその能力に気づいている。なお，統計的に有意なものではないが，これらに気づいた時期は，第一子より，第二子以降の場合の方がやや早い傾向があり，母親による認識に育児経験がある程度寄与しうることが示唆される。

それでは，何を手がかりにして，母親は自分の子の能力を判断したのだろうか。その判断の根拠には，表3に示す理由があげられた。光覚では，"光にまぶしそうにする"，"光に目を閉じる"など，光刺激への閉目がみられるという理由が最も多く50%をこえ，次いで，"明るい方や，顔をじっと見る"などの注視が30%近くを占める。形態視の根拠には，顔などの注視，顔などの追視が見られることが，それぞれ27.7%，20.0%と多く，次いで，"顔を見せると喜ぶ様子をする"などの感情の変化が16.9%になっている。

表3. 子の視覚能力を認識した理由

理由	光覚	形態視
光に対して閉目する	51.9%	0 %
顔，灯りなどを注視する	27.7%	27.7%
顔などを追視する	5.5%	20.0%
明暗や顔などに対する情動反応	5.6%	16.9%
漠然とそう思った	0 %	7.7%
その他	3.7%	1.5%
わからない，無答	10.2%	24.6%

(注) 複数の理由をあげることがあるので，合計は100%をこえる。

c. 視覚能力についての情報源

赤ちゃんがいつから目が見えるとか，動きを追うとかについて，話をだれかから聞いたり，本で読んだり，TVなどで見聞きしたことがあるかどうかの問には，79名（73.1%）の母親が"ある"と答えている。その情報源（表4）は，親や周囲の人が30.4%，育児書，本が30.4%，テレビなどのマスコミが25.3%と多く，母親学級や医療関係者による体系的な情報への接触は16.5%とそれほど多くない。また，育児書を使用しているかどうかと視覚能力についての知識の有無の関係をみると，育児書を使用している（56名）うちの57%が知識があると答えているのに対して，使用していない場合（52名）では，知識があるとしているのは43.0%で，育児書を使用している母親の方が相対的に知識率が高い傾向が認められる（$\chi^2(1)=3.1$，$p=0.08$）。

表4. 視覚能力に関する母親たちの情報源

情報源	人	(%)
親，周囲の人	24人	(30.4)
育児書，本	24人	(30.4)
テレビなどマスコミ	20人	(25.3)
医療関係者，母親学級	13人	(16.5)
その他（学校など）	4人	(5.1)

(注) 複数回答があるので合計は100%をこえる。

d. 母子接触時の配慮

"赤ちゃんをあやしたりするとき，自分の顔を見せるように特に気をつけていた"かどうかの配慮に関する質問には，81.3%の母親が"気をつけていた"と答えた。この配慮と母親の視覚能力についての一般的知識の間には関連が見られる（表5）。光覚，形態視，および追視が相対的に早く可能であると考えている母親ほど，接触時に自分の顔を見せるように配慮していた割合が高い傾向が一貫して認められ

表5. 母親の知識内容による母子接触時の配慮の違い

母子接触時の対面の配慮	知識内容					
	(光覚可能)		(形態視可能)		(追視可能)	
	1月未満	1月以降	1月未満	1月以降	1月未満	1月以降
気をつけていた	85.9%	73.5%	90.0%	77.0%	95.0%	77.8%
特に気をつけていなかった	14.1%	26.5%	10.0%	23.0%	5.0%	22.2%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

た(それぞれ, $\chi^2(1)=2.28$, $0.10<p<0.20$; $\chi^2(1)=1.64$, $0.10<p<0.20$; $\chi^2(1)=3.11$, $0.05<p<0.10$)。

V 考 案

以上見てきたように, 子の視覚能力に関する1か月児の母親の知識は, どのような質問の仕方をした場合でも, それが可能になるのは1か月頃からというのが最頻の答えであった。しかし, その分布をみると, 知識内容は, "出生当初から"と"1か月頃から"の二つに分極していた。このことは, 1984年時点での知識の普及がまさに途中の段階にあることを示していると推測される。

また, 何が母親たちの知識の源泉になっているかをみると, 医療関係者や母親学級などからの体系的な知識の普及によるものが少なく, 親や周囲の人, 育児書, テレビなどによる情報の占める割合が高いことがわかる。特に, マスコミ媒体による母親への影響は無視しえないものがあることがうかがわれる。

近年, 母親に新生児の能力に関する知識を積極的に与えることによって, 初期の母性行動を促進しようとする試みが行われつつある。[4)5)6)] 普通, これらの試みにおいては, 新生児の視覚刺激への反応性, 追視などを含むブラゼルトン新生児行動評価尺度の母親へのデモンストレーションや, 母親自身による実施の経験を与えるなどの手続きがとられている。その結果, 母親の子に対する働きかけが促進されることも一貫して確認されてきた。特に, このような変化は, 母子双方にまたがる意味を持っていると考えられる。一方では, 母親が子どもへの働きかけや応答性を増すようになることによって, 最終的に子の発達が促進されること, 他方では, 子の能力を知ったことによって, 母親自身が子との相互作用から, よりいっそう喜びを得るようになることである。

この種の知識は, 乳児の疾病の症状に関する知識などとちがい, 知識の有無が致命的な結果をもたらすことはない。しかし, 今回の調査結果にもあらわれたように, その知識内容の違いが母子接触のあり方に影響を与えることを考えると, この種の知識の組織的普及について, 今後もっと積極的な配慮をしていく必要があるのではないかと考えられる。

VI 文 献

1) Goren, C.C. et al.: Visual following and pattern discrimination of face-like stimuli by newborn infants. Pediatrics, 56: 544, 1975

2) Atkinson, J. and Braddick, O.: The development of visual function. In Scientific Foundations of Pediatrics, 2nd ed. (ed. J.A. Davis and J. Dobbing), 865, William Heinemann Medical Books London, 1981.

3) 小林登: 発育とその原則, 別冊発達ー乳幼児の発育と母と子の絆ー, 6, ミネルヴァ書房, 京都, 1984.

4) 加藤忠明: 新生児の能力を見る, 幼児開発協会, 東京, 1983.

5) Worobey, J. and Belsky, J.: Employing the Brazelton scale to influence mothering: An experimental comparison of three strategies. Devel. Psychol., 18: 736, 1982.

6) Anderson, C.J. and Sawin, D.B.: Enhancing responsiveness in mother-infant interaction. Infant Behavior and Development, 6: 361, 1983.

(付記)

本研究には, 川嶋ゑみ子, 板宮優子, 佐藤雅子の三氏の御協力を得た。